

# ルーサー・レポート（翻訳） — 9代目校長ルーサーの見た北陸女学校（1） 1914年～1916年

Annual Report of Hokuriku Jo Gakko written by Ida R. Luther,  
the 9<sup>th</sup> president of the school (1) 1914 - 1916

辻 直 人\*

## 要旨

本稿は、1914年から1920年の間に北陸女学校の第9代校長を務めたアイダ・R・ルーサーによる年次報告書の翻訳である。ルーサーは在任中に毎年1通ないし2通の年次報告書をまとめ、理事会及び海外伝道局宛に送付していた。これは、大正初期の北陸女学校の様子を知る貴重な史料である。今回は現存する7通の年次報告より前半の3通を翻訳した。北陸女学校30周年を迎え、時代が明治から大正に移り変わる中で、校地や校舎の拡大、生徒募集、生徒の信仰問題、抱えている課題などについて綴られている。

キーワード：アイダ・R・ルーサー／北陸女学校／年次報告

## 解説

本稿は、北陸女学校第9代校長を務めたアイダ・R・ルーサー（Ida R. Luther）による北陸女学校年次報告の翻訳である。

### <人物について>

アイダ・ルーサーは米国長老教会海外伝道局より1898年に派遣された女性宣教師であり、来日と同時に北陸女学校に赴任し、英語と聖書を教えた。1902年からは第7代校長を務めた。また、フランシナ・ポーターが療養のためアメリカへ帰国した後（1901年）は英和学校と英和幼稚園での職務も兼任した。しかしルーサーも病気を理由に1909年11月、校長を辞任し帰国している。その後、療養の甲斐あって健康を回復し、朝鮮伝道へと赴いたが、再び金沢での伝道・教育活動に従事することになり1913年北陸女学校へ再来任し、1914年からは第9代校長に赴任した。2度目の校長職は1920年9月までで、この時の辞職理由も

病氣療養であった。北陸女学校の外国人校長時代はルーサーの辞任と共に幕を閉じ、以後は中沢正七が校長に着任した。ルーサーは2期合わせて合計14年もの長期に渡って校長を務めたことになる。

帰国後は再び療養の結果健康を取り戻し、1921年からは松山での伝道に従事する傍ら、北陸女学校の理事を務めることになった。翌22年には大阪のG・W・フルトン宣教師宅でコースランド博士と結婚し、夫妻で今度は上海に赴いた。

### <史料について>

今回紹介する史料は、ルーサーが2度目の校長を務めていた1914年から1919年までの6年間に、ルーサー本人が北陸女学校の活動を報告するためにまとめた年次報告（Annual Report）である。全部で7通残っている。すなわち、1914～1915年度1通、1915～1916年度2通、1916～1917年度2通、1917～1918年度1通、1918～1919年度1通である。1915～1916年度と1916～1917年度の報告に関しては2通残っている。その理由ははっきりしないが、恐らく学内の理事会に提出

\* TSUJI, Naoto  
北陸学院大学短期大学部 食物栄養学科 教育者論

したものと、アメリカ本土の海外伝道局に提出したものの2通ではないかと想像する。これらの史料は、昨年本学が125周年に関連した諸行事を行うにあたり、学内所蔵の史料収集整理を実施したことで見つかったものである。

史料は便せん用紙に手書きで綴られており、大正前期の女学校の風景を知る上で、貴重な史料と言える。『北陸学院百年史』等には載っていない出来事も触れられている。これら7通の年次報告のうち、今回は前半の3通について翻訳した。残りの4通に関しては、次号で掲載する予定である。

以下掲載した報告書によれば、1914年から1916年までの間に、北陸女学校は校地を拡大し校舎の増設、30周年記念式典の開催、生徒数の増加など明るい動向が見受けられた。こうした動きの背景として、ルーサーが市内の公立学校長を招くなど、積極的に地域の教育関係者と関わろうとしている様子が報告書から窺える。また、同窓会も奨学金を集めたり行事にも参加したりして、学校の働きを一緒に盛り上げていたことが分かる。学内でキリスト教伝道も熱心に行われていたことも伝わってくる。

## 翻訳

### 1. <1914年度報告>

北陸女学校年次報告 1914～1915

金沢、加賀、日本

理事会宛に私からお送りする最初の年次報告を準備するにあたり、私はこの理事会を任命したミッションの方針を心から承認するものとして、理事会にこの報告を提出いたします。また、私個人に対し、あるいは学校に対して、昨年度中に支援をくださった理事お一人お一人に心からの感謝の意を表します。

昨年度は1914年4月10日に始まり、1915年3月26日に終わりました。とても穏やかな一年ではありましたが、重大な出来事もありました。新入生徒数はいつもよりも少なく23人しかいません。皇太后妃<sup>1</sup>がお亡くなりになった時は国全体が深く喪に服したため、数日しか学校は開かれませ

でした。ゲストを招いて行う公的な行事は、今年度は一切行われませんでした。クリスマス、文学鑑賞会、スポーツや遠足といった全ての学校行事は静かに非公式に行われました。

今年度は、学校のグラウンド裏手の土地の購入と体育館<sup>2</sup>の建設という2つの興味深い出来事がありました。

よく知られているように、多くの関係者が何年にもわたって、土地を手に入れるため様々な方法を駆使していきました。しかし、土地の価格はここ数年値上がりし続け、ケネディ基金から手頃な資金の提供が行われはしましたが、小立野の土地を売りに出して資産を合計しても、望んだ土地一区画の購入を実現することは難しそうでした。しかし突然、地主が考えを変えたために、私たちはその区画を手に入れ、現在グラウンドを東の通りから西の川まで拡張しました。新たな土地の大部分は場所としては低い位置にありますが、価格は高く、大いに重宝しています。

私たちの学校としての誇りである新しい体育館は、1月の授業から正式に使用され始めました。体育館の存在意義は十分に証明されました。というのも冬はとても厳しく、屋外での授業は数か月にわたって不可能なのです。女生徒たちは体を動かすのに最適な場所を得ることで、スポーツに対する関心に特に顕著な変化が見られました。毎日午前中に15分の休み時間がありますが、賑やかに過ごしたい時は活動的な時間も取り入れるようにしています。

卒業式は3月26日に行われ、11人の女生徒が巣立っていきました。このうち10人は正規の学業課程出身者で1名は音楽科出身者でした。卒業生のうち2名は幼稚園教諭に赴任し、1名は神戸の訓練学校へ、1名は女学校で裁縫の教師になりました。彼女は我が校へ入学する前から裁縫に関しては顕著な才能を持っていました。認可を受けた学校からの卒業証書が欲しかったのです。今後は文部省の試験を受けて、特別に裁縫教師としての免許状を得ることができます。

クラスは全体としては必ずしも満足のいく状態ではありませんが、人格において成長の足跡が多く見受けられます。私たちは、受けた授業が彼女たちの人生において大いに意味のあるものとなる

ように、世界の学校でも同様の働きが起こるようにと祈っています。

次に、私たちの教職員について紹介します。報告せねばならない多くの人員刷新がありました。1年前の4月に学校が始まった時、寮母であり英語教師でもあった島倉さんは病気になったため、代わりに女子学院での3年課程を終えた本学の卒業生を呼ぶことにしました。彼女は先月の終業時まで私たちと共にいて、学校や寮で、またミス・ハリスの個人教師としてもよい働きをしてくれました。札幌ステーションから一時的に手伝いに来てくれていたミス・エヴァンスは、素晴らしい奉仕を1年してくれた後に元の仕事へと戻っていききました。

ミス・ギボンズは昨秋自分の仕事に復帰することができなかつたため、広島・呉ステーションにあるミッションのご厚意で、ミス・ハリスが1年間こちらに来てくれることになりました。彼女は生徒たちに歌を教え、校舎を明るい陽射しで満たしてくれています。

ミス・マンデーの健康は気候の変化が必要とのことなので、彼女を北海道へと転出してもらうよう依頼を出しました。

歴史と地理の教師であった清水さんは5年の間、信仰的な奉仕をしてきましたが、昨秋に退職しました。その穴埋めとしてすぐに金沢在住の駒井夫人が入りました。非凡な才能と経験を持った教師です。私たちは3か月もの間、学校の礎的存在であるミス・ジョンストンを待っていました。とうとう11月半ばに彼女は私たちのところへやって来ました。正式に歓迎をしてからは、学校でも宣教分野においても彼女は普段通りのエネルギーと熱意を持って、仕事に打ち込んでくれています。

草野夫人はかつての生徒ですが、夫がヨーロッパ出張のため、彼の不在の間に特別な学びをするため戻ってきました。そして二学期の間は、できる限り寮の世話をしてくれました。彼女は毎月私たちの許から去らねばならないので、我が校の卒業生で女子学院を最近卒業した人に、草野夫人に代わって寮生活の世話をしてもらうようお願いしました。

私たちの本科でなされた仕事の質は、とても満

足のいくものでした。8人いる常勤教師のうち5人は高等師範学校卒業です。スタッフは、昨秋加わった駒井さんを除けば全員洗礼を受けたクリスチャンです。全員が、学内の宗教活動において活発に役割を担っています。これら教師のうち2名はこの年度に受洗しました。

生徒に対する宗教活動の直接的な結果に関して言えば、残念ながら洗礼については多くを報告することができません。在校生のうち8名のみです。しかしながら、キリストへの信仰を告白し学内の青年会<sup>3</sup>と関わりを持っているメンバーがおります。彼女らのうち7名は受洗の許可を乞うていますが、両親より認めてもらったのは僅か1名のみです。

学業面で、この1年の間に3名に対して厳しい措置を取らねばなりませんでした。このうち2名は、学校を退学させられました。3人目は教職員の許しを得て戻ってきました。ほとんどの生徒たちは、自分たちの学業を真剣に受け止めており、最善を尽くしています。

かつての報告でお伝えしたように、私たちの生徒たちは以前の年よりも若い人たちが集まっています。それに加えて、昼間通学してくる生徒は10年前と比べるとずっと多くなっています。しかし、失望する必要はありません。というのも、折に触れ私たちのもとには卒業生が洗礼を受けたという知らせや、家族を教会に導いたという報告が入ってきます。僅か数か月前も、ある卒業生が家族でメソジスト教会の会員になったことを伺いました。別の卒業生は妹を教会に導いたと聞いています。中澤氏は「卒業生たちは2年間本校で過ごすことで、キリスト教教育から強く影響を受け、少なくともキリスト教的理想にのっとなって人生を方向付けようとしている」と語っています。私たちは今のところ多くの収穫を目にすることはありませんが、後年キリストの命の力が多くの実りを与えてくれるでしょう。

この都市における教育界の権力者との関係については、ただ友好的であるだけでなく、段々と有益なものとなってきていることを喜んでいます。〔第四〕高等学校長夫妻は、何度も教師の獲得に力を貸してくれました。第一中学校長夫妻も同様です。1月に私たちは市内の小中学校長全員を招い

て、校舎の視察をしてもらい、また学校の諸計画について話し合い、寮で共に食事をしました。食事は上級生2クラスが支度した欧風料理でした。17校のうちの15校の校長が参加し、謝意を示してくれると共に、できる限りの協力を約束してくれました。それ以降、彼らの協力の申し出が誠実なものであることが証拠されています。校長たちの助言で、私たちの学校で保護者会を開いたことは既に報告いたしました。更に、今月45人の生徒が新たに入学しましたが、その大半が市内小学校出身者であり、それにより、この都市において私たちの働きが徐々に認められてきていることを確信しています。

1年を通じて、教師たちは実際に市内全ての種類の学校と、近郊にあるかなりの数の学校を訪問しました。こうした学校訪問で、他の地域から多くの生徒を獲得するのは難しいと考えるようになりました。多くの学校がこれらの地域において近年建てられ、両親は近所の学校に子どもを通わせたいと思うのが自然だからです。

小学校長に集まってもらった会の他に、この都市の主要な新聞社の代表者を招待して私たちの学校を一緒に訪問してもらい、共に食事もしました。私たちは教育方針を明確に説明し、彼らは皆学校に対して友好的な興味を表してくれました。年度の終わり頃には、いくつかの新聞が私たちの働きに関する記事を載せてくれました。それは今までに書かれたどの記事よりも好意的な内容でした。

新年度が始まって入学者が増えたことを言及してきました。生徒の数は以下の通りです。第一学年39名、第二学年19名、第三学年24名、第四学年18名、合計100名。45人が今月新しく入学しました。彼女らのほとんどが第一学年に入学します。彼女らの小学校から届いた調書は、例外なく良い内容でした。

私たちの方針は、毎年50名入学させることです。可能ならば在籍者は150名以上を維持したいと考えています。それ以上に、私たちは本科を一層完成した形に作り上げていきたいと願っています。もしそれが完成すれば、日本のこの地方において最もランクの高い学校になります。私たちは卒業生のために家政学の特別コースを維持し続けたいと望んでいます。

私たちが実現したいと願うもう1つの計画は、年ごとに前田侯爵から銀時計を学業及び行動の立派な学生のうち最高ランクの者に対して授与してほしいというものです。侯爵はこうした報奨を市立女学校に渡しています。もし私たちの生徒が同じランクに達することができたなら、侯爵は我が生徒らの業績をも喜んでくださることでしょう。

学校が設立されて30周年になるので、県知事や役所の長たちを招いてこの秋に記念のお祝いをしたいと計画しています。また、卒業生の同窓会も計画中です。このように、学校の様子を市民に知らせることで、将来彼らから援助を得られることを期待しています。

私たちの必要としているものはたくさんあります。私たちはもっと科学的器具、大きな図書館、新しいピアノ、更にいくつかのオルガン、そして家政学のための完全な装備が必要です。私たちはこれらの必要とされるものを一つずつ近いうちに獲得することを希望します。私たちは理事会に対し、私たちの必要としていることを外国伝道局や関心を持ってくださる方々にお知らせくださることをお願いします。

私たちの組織について述べるに当たり、日本人の若い女性がキリスト教教育に対して生涯に渡り公的にも私的にも高い理想を持って取り組んでくれることを望んでいます。私たちは神が今後来る年も来る年も50人以上の新入生を与えられ、本学が国民の生活において、影響力のある女性となるための訓練を受ける生徒で満たされることを信じます。昨年の神の豊かな祝福のおかげで、心からの感謝を持って、新年度は神の御力が私たちを助けてくださり、学校生活における様々な活動を導いてくださることを確信しています。

敬白

アイダ・ルーサー

## 2. <1915年度報告(1)>

北陸女学校年次報告

金沢、日本、1915～1916

この学校はちょうど30年目の務めを終えまし

た。特別な行事はこの1年のうち数か月にわたって実施されました。前年度の報告でも述べたように、1915年度の入学生数は過去5年以上の中では最高の人数でした。多くの新入生が来たことや、作法室(Domestic Science Cottage)が春学期の間に建てられる見通しが立ったことから、学内に活気が満ち溢れる中で、新年度の働きを始めることになりました。

春学期中の興味深い行事は、何と言っても作法室の建設でした。この新しい校舎で私たちの働きは大いに助けられ、特別学科の学びにおける効率を高めています。次に重要なことは、文学と言語の教師である向井夫人の皇居訪問でした。そこで彼女は賞金50円と高価なシルク製のベルトを、皇族の皇女の教師であったことへの感謝の意として受け取りました。皇女様はこの度皇太子と結婚することとなって、そのお祝いとして、かつての教師に贈られたのです。皆で、ご成婚と向井先生が皇室によって与えられた栄誉をお祝いしました。彼女の人柄や経歴に関して、好意的に地元の新聞で報じられました。

これら2つの特別な出来事の他に興味深いこととしては、春の文学集会で生徒たちが日本語や英語、或いは音楽で優れた作品を選んだことです。春の遠足では激しい嵐に見舞われましたが、その地域の小学校教師たちが親切に我々を受け入れて楽しませてくれました。学期の後半には、私たちの教育計画にかなりの興味を持ち、子どもの教育に対しても熱心な保護者たちの集会がありました。

春学期は興味深いことでいっぱいでしたが、誰もが秋を心待ちにしていました。秋には私たちの学校の30周年をお祝いし、日本伝道局主事のR.E. スピア博士(Dr. R. E. Speer)をお招きすることになっていました。

9月から10月上旬にかけて、記念式のためのリハーサルや準備で、授業外の活動も賑やかな様子でした。

10月23日が記念式の日でしたが、理想的な秋晴れでした。天の御父がこのような特別な機会を与えてくださいました。もう1つ特別な祝福だったのが、スピア博士の出席でした。博士の日本滞在中に私たちの行事を行うことができ、とて

も幸運でした。招待客の中には、市内の教員養成所出身である60名の教師が含まれています。これらの人々は皆私たちの式典に出席してくれました。彼らの他に、全ての市立学校長とこの地域の教育長が出席しました。幾人かの卓越した人たちが、その日の式典で役割を担ってくれました。150名以上のゲストが、この機会に最もふさわしく装飾された新しい体育館に集まりました。

スピア博士からは有益な講演があり、ダンロップ博士からは学校へのメッセージが、官立学校の代表者や卒業生や生徒からは心のこもった挨拶とお祝いのメッセージが読まれました。こうした1つ1つが、式典を興味深くかつ有意義なものとしてくれました。

記念式典に続いて昼食会が開かれました。これは宣教師の友人たちが企画してくれたパーティでした。この会の席では、嬉しい驚きがありました。私たちの良き友人である第四高等学校長溝渕氏がゲストに働きかけて、我が学校に対して心のこもった万歳三唱をしてくれたのです。

午後には、ミュージカルを開催しました。とても多くの観客、保護者や友達が集ってくれました。学校関係者と同窓生たちは英語でカンタータを歌いました。他にも友人たちによってなされた楽器演奏や声楽はとても楽しく、皆に喜ばれました。

この記念式に際して主事や友人たちがアメリカから訪問してくれたり、地方紙や地元の新聞でこれらのイベントが好意的に報じられたり、多くの友人から心のこもった挨拶をいただけたりといったことは、喜ばしい思い出となりました。今後困難な仕事に直面して暗く憂鬱な日々を過ごさねばならなくなったとしても、この思い出は輝いています。

1つお祝いの時を終えましたが、もう1つ別の計画も立てています。それは、国を挙げた最も重要な動きです。私たちは帝国の一員として、今上天皇の即位式、より正確に言えば皇位の継承を見守りました。10日間あるいはそれ以上にも及ぶ式典があり、何日もわたって夕方に提灯行列や催し物が行われ、民衆が集まり、国を挙げての喜びと、陛下に従う数百万の臣民として惜しげない敬意を表明しました。

最も重要な国家行事である天皇即位の祝賀会に

において、また私たちの創立30周年記念式典において、教職員と生徒たちは学校に万国旗を飾りました。また私たちは、記念の行事が開催される前に造成された日本庭園<sup>4</sup>に30円の寄附をしました。同窓会は学校に対して、これらのイベントを祝して贈呈品もいただきました。彼女たちは500円の計画で、恒常的な育英資金を集め始めています。約束の額の全額はまだ集まっていませんが、2名の有能な生徒を部分的でも支えるだけの額は受け取りました。その2名は卒業後に一定の額を返還する約束をしており、その返金額でまた別の学生を援助するようにします。冬の間には、新しい技芸科(Domestic Arts course)の準備を行いました。この新しい学科は地元紙で十分に宣伝されました。チラシも地域の全ての公立中学校へと送りました。しかしながら、多くの人にアピールはしませんでしたので、この学科での教育を強く望むという声は余り聞かれませんでした。私たちは、一般的には工業学校の存在が人々の要望と合致しているという結論に達しました。しかし、私たちはこのコースを持つことができ喜んでいました。というのも、上級者向けの数学や科学についてこられない本科生徒のために、この学科が代わりとなる場所となったからです。彼女たちには、市立の工業学校に転校してもらい代わりにこの学科へと転科してもらい、卒業までそちらで勉強してもらいます。この学科に新たに入学した数人は通常の本科での授業を履修する一方で、新たに加えられた裁縫の授業を歴史や地理、上級数学の代わりに選択することに決めました。

3月25日には、政府に認可されて以来最高の15人を卒業させました。このうち6人は日本語の成績が優秀で、6人は英語免状を受け取りました。1名は女子医大に入学し、もう1名は歯科学校に入りました。最も優秀な生徒は金沢の幼稚園で教師になりました。別の卒業生は来年高等師範学校への入学を希望しています。その他の卒業生は、私たちの知る限り家に留まっています。卒業生の6名は受洗したクリスチャンで、他の2名は教会や学校礼拝に積極的に参加していましたが、洗礼は受けていません。他に4名が定期的に教会に集っています。このクラスはとても良いクラスで、学校行事も皆がよく手伝ってくれました。

この1年、教師陣には全く変動がなかったと報告できることを嬉しく思っています。教職員による働きはとても質が高いです。誰もが学校の運営に強い関心を持っており、今後の計画や学校の方針を進めていくことに対して意欲的に協力してくれています。

教師と生徒たちの健康状態は概ね良好です。しかしながら冬の間は市内でインフルエンザが流行したため、数人の具合が良くありませんでした。

この1年で2名の生徒が素行不良で退学しました。他にも数名に教育上の問題がありました。2度ほど上級生のクラスでトラブルが起きました。1度は教師との関わりで、もう1度はクラスメイトとの関係での問題でしたがすぐに改善され、平和裡に関係は修復されました。

この1年の間に生徒たちの間で特に信仰の覚醒は起きませんでした。通常の集会が行われ、時折外部の説教者が招かれて生徒たちに話をしてくださいました。クリスチャン女生徒は彼女ら独自の集会を行っていて、しばしばとても有意義なプログラムを準備し、市内で私たちが行っている日曜学校の働きも助けてくれます。生徒のうちの11人とかつての生徒1名がこの1年間で洗礼を受けました。

以前報告したように、私たちの生徒はとても若い少女たちです。両親たちは娘さんたちをキリスト教学校に通わせたいようです。しかし娘たちがクリスチャンになりたいと願うことに関しては大きな邪魔をします。更に、時々両親たちは最も優秀な生徒を卒業する前に辞めさせてしまいます。このことは私たちの日頃の学校生活や教育活動と同様に、宗教活動に対しても大きな影響を及ぼします。この学期も、2名の上級生が学校を去っていきました。その2名には、私たちは学習面において、また霊的な働きにおいてクラスをリードしてくれることを期待していました。

昨年私たちは、一昨年が23名の入学者だった一方で、新入生が1915年4月に50名入学し、学生数が著しく増えていることを報告いたしました。私たちはとても勇気づけられ、今年も同様に生徒が増えてくれることを期待していました。地元の有名な新聞にも好意的な記事がたくさん載っていましたし、大阪の日刊紙にも同様のことが書

かれていました。教育界の著名人が30周年記念式典で重要な役割を担ったことが学校の人気を煽り、その働きに対して人々の関心を一層掻き立て、生徒も再び多く集まるのではないかと期待していました。私たちは今年の入学者に関しては見誤りました。その数は少なく、良い家庭の出身者でしたが、集まり具合はとても遅く、他の都市の学校への入学許可が下りなかったために本学に来た者もありました。友人の軍人の娘もおり、2名は僧侶の子どもで、2名はこの都市にいるセヴンスデー・アドヴェンティスト伝道者の子どもです。

全員で30名の入学登録がありました。24名が第一学年の生徒で、残りが上級クラスです。現在の在籍者総数は昨年度と同様にとどまっています。すなわち100名です。人数は後退しましたが、減少した理由を調査しなければなりません。

教師の何人かは、これがキリスト教の置かれた現実の地位だと感じています。他の教師は、天皇の即位が古い宗教の復興を促し、今年はその影響を受けたのではないかと考えています。そうだとしたら、来年は顕著な増加が再び起こると思われ

ます。北陸道で依然として存在する〔キリスト教への〕反対意見を打ち破って、人々の心に届くような新しい方法や方策に関するいかなる助言でも伺うことができたなら、嬉しいことでしょう。私たちは全ての人に対して敬意を払うよう自戒し、高い規範を維持しなければならない。同時に、学校の設立目的を遂行しそこなわないように、私たちの宗教上の決意を熱心に保たなければならないと考えます。

フィラデルフィアの女性伝道局からの話によれば、伝道局への献金が大変増加しているの、財政的には良い年であります。私たちの予算は少なくとも昨年と同様ですが、給与面でいくらか増加できればと願いますし、校舎もいくらか改善して設備を増やして、より高度な学問と修養の発展を特に強調したいと願っています。

この1年多くの祝福をお与えくださり、来る年にも主の知恵と導きを確認してくださった神に心から感謝しています。私たちは自信を持って、目の前の責務に取り組んでいきたいと思ひます。何故なら、私たちを導かれる方は、主の無限の愛に

信頼を置く者たちを絶対に失敗へと導かないからです。

敬白

アイダ・ルーサー

通学してくる生徒の数	80
寄宿者数	20
奨学生	6
学校からの全額奨学生	4
同窓会からの少額奨学生	2
クリスチャン数	20
教会に通う人数	40

### 3. < 1915年度報告(2) >

#### 北陸女学校年次報告

金沢、加賀、日本、1915～1916

この1915年から1916年の年次報告で、我が校の歴史において大いに重要な出来事について報告できますことは、私にとって栄誉なことです。

新しい1915年度はここ数年来で最も大勢の生徒を収容して始まりました。50名の新生生が加わり、教職員及び生徒たちの間には新しい活気がみなぎりました。

新しい作法室の建設が1915年4月に始まり、同年7月に完成しました。それは魅力的な日本家屋で、学内の活動にとってはとても実用的な価値のあるものです。私たちは親愛なる友人で近隣居住者でもあるデットワイラー宣教師 (Rev. J. E. Detweiler) が多くの時間を割いてくださり、作法室の建設に関して全て責任を負って、惜しみなく技術を提供し、現場監督もして下さったことを心から感謝しています。

春学期の活動は様々でした。しかし学内にいる誰もがこの年の大イベントである30周年記念式とお祝い会、そして日本担当の伝道局主事であるスピア博士のいらっしやることを心待ちにしました。

9月上旬から記念式当日の10月23日まで、学内は興奮して騒がしく、記念式当日に上演することになっているカンタータのリハーサルに実に多

くの時間を費やしました。教職員、生徒、同窓生皆が熱心に準備に取り掛かり、近所に住む学校関係者がゲストのための席に椅子を貸してくれました。教育長、学校長、新聞記者、教会の人たち、市内で会議に参加している60名の小学校教師を式典に招待して、この日のために装飾された新しい体育館の一角に席を設け参列してもらいました。式典当日は誰もが認めるように好天に恵まれました。スピーア博士の臨席と適切な祝辞、教育庁からの謝辞と学校を代表してダンロップ宣教師からのメッセージ、同窓会や生徒、学科を代表しての挨拶など、全てが合わさって有益かつ楽しい機会になりました。昼食はお昼の時間に全てのゲストにふるまわれました。更に、市内の学校から来た友人たちは、第四高等学校校長の溝渕氏の音頭による学校のための万歳三唱を唱和することで、私たちに謝意を表してくれました。午後はカンタータ及び同窓生、生徒と宣教師たちによる音楽演奏が行われました。午前中から見えているゲストの他にも、多数の保護者や友人たちが音楽を聴きに集まり、皆喜んで聴き入りました。新聞はこのイベントを好意的に報じてくれました。感謝の贈り物が同窓生や友人たちからたくさん寄せられました。

このような光栄なる時に、また天皇陛下の即位式にあたって、教職員と生徒たちは学校に万国旗を寄贈し飾り付けました。また、記念式典に合わせて、作法室を際立たせるために造られた本物の日本式庭園も教職員と生徒たちの寄贈によるものです。同窓会は卒業後に月々返済可能な生徒に貸与する目的で、500円もの額を奨学金として集め、学校に寄附してくれることになりました。返済された奨学金は、また別の学生のために用いられます。

国民全体と同じように、私たちも天皇の即位を見守り、祝日を守ると同時に学内でもふさわしい行事や学校晩餐会を催しました。

こうした一連のお祝い行事の他にも、この学期にはクリスマス祝会を催し、大勢の保護者や友人たちが集いました。生徒たちはクリスマス・メッセージを歌や物語で表現し、クリスマスツリーやケーキ、贈り物などで会場を幸せな気分にしました。

冬学期は3月25日に開催される卒業式の準備をしました。この日、15名の少女が卒業しましたが、このうち6名は優秀な生徒でした。この6名は英語の免許状も受け取りました。卒業生のうち1名は女子医科大学へ入学し、もう1名は歯科学校へ、もう1名は私たちの金沢幼稚園の教師になりました。他の1名は高等師範学校に入学するため準備をしています。更に他の1名は、近郊の会社の秘書となりました。このクラスのうち6名は洗礼を受け、更に数名が卒業前に洗礼を希望していましたが、家庭からの許可が下りませんでした。

学校における宗教活動は教師と生徒によって続けられており、定期的に聖書を学ぶ会やYWCAの集会、洗礼を希望する人のための特別な学び会が持たれています。この1年、市内の教会でも特別な集会が多く開かれました。私たちは卓越した教職者たちの説教を聞く特権が与えられました。生徒たちも同様です。この1年で健全な霊的成長が見られ、12名の少女が教会員となり、その2倍以上がイエス・キリストへの信仰を告白し、YWCAの活動にもつながりました。第二学年の生徒のうち寮に住んでいる者は全員が洗礼を受けたいと表明しています。

この2年間、1名の交代を除いては同じ教職員を維持できていることは幸運でした。ただ1名を新しい寮母として昨年向かい入れました。この女性は3年間女子学院で教育を受けた後に、私たちのもとに来ました。教職員は全員、高い教養を身に付けることと同時に、キリスト者としての品位を高めていくという私たちの願いを共有しています。

新年度は4月に始まり、30名の新生生が加わりました。1年前よりははくらか少ない人数です。しかしながら、トータルの在校生数は昨年よりも若干増えて、現在106名の正規学生が在籍し、その他に音楽、お茶、茶道を習いに来ている生徒も数名います。

フィラデルフィア伝道局の女性たちから、500円もの特別な献金が惜しげもなくささげられました。これは私たちが家政学の設備に関する5年分の計画に対して、援助の要請をしていたことへの応答として送られたものでした。この心のこもっ

た贈り物で、昨年建てられた作法室に必要な物を備えることを可能になりました。そして、女子教育にとってとても重要な技芸科指導の効率性を高めました。

年を追うごとに、設備や献身的な教師陣を充実させ、より多くの生徒を獲得し、より実践的な教育コースを増やし、そして霊的生活を一層深めつつ、人生の戦いにいどみ神の国を建設するために、よく訓練されたより多くの若い女性たちを世に送り出したいと望んでいます。

特別な祝福に満ちた学校でのこの1年、有用な日曜学校の集まり、生徒たちによる英語聖書学び会の発展、特別伝道集会1つ1つを振り返ると、私たちの心は感謝の気持ちになります。この国の若い人たちの心に植えられた種は、間もなく大きな収穫となることでしょう。私たちが信仰を持って種を蒔いていけますように。

アイダ・ルーサー

---

<注>

- 1 昭憲皇太后のこと。明治天皇の皇后で1914年4月9日没した。
- 2 『北陸学院百年史』では「雨天体操場」と呼ばれている。原語は *gymnasium*。
- 3 キリスト教女子青年会のことと思われる（『北陸学院百年史』192頁）
- 4 1915年9月に落成した作法室の庭のことで、日本式小庭園。『北陸学院百年史』によれば、「これは御大典を記念して職員生徒一同が醸金し、造営したもので、その費用は32円であった」（189頁）